

未解読文字の解読と契丹文字<sup>1</sup>

吉池孝一

1. 言葉と文字

未解読文字の解読という文字の解明が前面に出るが、文字を読む目的は文の背後にある言葉を理解することにある。表面にある文字は言葉表現する道具であり、言葉との関係は精密なものから暗示するだけの粗雑なものまで様々である。様々であるが、便利な道具として無理なく言葉を指し示すことが求められる。“話し手と聞き手の脳裏にある言葉音を認識する習慣の型（音韻観念）”から離れた文字は不便であり、ふつうそのような文字は受け入れられない。別の言い方をすると、文字と言葉の関係は言語行為の“常識から離れたもの”とはならない。日本語を“音声”という面から見れば、前舌母音の[a]と後舌母音[ɑ]の別はある。しかしながら日本語話者は両者を区別する発音の習慣を持たないので、両者を区別する文字を作ることも、よそから文字を借りて2つの音を区別することもない。また、日本語話者は音節末に子音を発音する習慣を持たないので、言葉《はち(8)》を「hach」などと書くことはない。未解読文字の研究に於いても同様である。未解読文字の背後にある言葉が持つ習慣から、それを書き表す文字は離れることはない。したがって、未解読文字の言葉が既知である場合、それを書き表す文字の音や用法は、言葉の音の習慣から離れることはないとの見通しのもと研究を進めることになる。

2. 契丹文字解読の見通し

契丹文字の背後にある契丹語はモンゴル語系統の言語とされる<sup>2</sup>。そうであるならば契丹文字の用法はモンゴル諸語から想定される音の習慣に沿うはずである。一例を挙げる。モンゴル語の音節末子音の種類は限られている。もしも研究者が、契丹文字の分析に於いて、現代のモンゴル語諸方言や中期モンゴル語が持つ音節末子音を越えて、契丹文字に多様な音節末子音を設定するならば、契丹語話者も文字と同様に多様な音節末子音を持っていたとの前提に拠らなければならない<sup>3</sup>。そうでなければ文字表記は、契丹語話者の発音の習慣か

<sup>1</sup> この文章は、吉池孝一・中村雅之・長田礼子編著(2020)『女真語と女真文字』(CD書籍)古代文字資料館2020年所収の「女真文字談義(9)」(吉池)75-85頁及び「女真文字談義(12)」(吉池)102-107頁を参照した。

<sup>2</sup> 本稿の注7参照。

<sup>3</sup> 大竹昌巳(2015)は契丹語の母音の長短について述べた興味深い論文である。母音の長短の議論と直接関わるものではないが、基本となる文字の表音システムについて気になる点がある。論文の最後に「附表 契丹小字の v, vc, vcc 型字素の音節格子表」がある。このうち vc タイプ(母音+子音)として音節末子音に -p と -b、-t と -d、-k と -g、-č と -j を認める。vc タイプの c におけるこのような文字(が示す音)の対立は、その文字システムを支える契丹語の音節末子音に同様の対立があったと想定して、それではじめて無理なく理解でき

ら逸脱することになる。

### 3. 未解読文字のタイプ

西田龍雄(1982)<sup>4</sup>は未解読文字を文字と言葉が既知か未知かにより、A B C Dの4つのタイプに分ける。文意を表にまとめると次のようになる<sup>5</sup>。

		文字	
		既知	未知
言葉	既知	A	B
	未知	C	D

BとDは解読が必要な未解読文字である。Cはどうであろうか。文を読む目的が、文字の背後にある言葉の理解にあるからには解読は必要である。問題はAである。Aについて西田龍雄(1982)は、「文字の性格と言葉の体系の間には、つねにずれがあるのが普通だから、かりに文字組織や言葉の体系がわかっている、その両者の間の関係が明瞭にならない限り、その資料が解明されたことにはならない」とする<sup>6</sup>。解読の定義にもよるが、Aは解読と言うよりも分析とか解釈と言う方がふさわしいかもしれない。以上により、解読半ばとされる契丹文字の文章を見たならばBCDのどのタイプとなるであろうか。

---

る。古蒙古語では想定しにくい音節末における対立(-pと-b、-tと-d、-kと-g、-čと-j)が、契丹語に有ったのであろうかとの疑問が払拭されない。この点について大竹氏自身は「1.3.契丹小字の文字論的特徴」の注12において「ただし字素 $\text{止, 令, 來, 入}$ や $\text{傘, 赤}$ 等に $\langle ep \rangle$ ,  $\langle et \rangle$ ,  $\langle eč \rangle$ ,  $\langle ek \rangle$ や $\langle ez \rangle$ ,  $\langle ev \rangle$ 等の音価を認めるのは問題がないわけではない。契丹語では強子音 $p, t, č, k$ は語頭にしか立たないと考えられ(武内2015)、漢語音専用の $z, v$ 等も音節頭子音でのみ用いられるものだからである。ただ、このような音節頭子音を表す用法しか見られない字素に $\langle eC \rangle$ の音価を認めるか $\langle C \rangle$ の音価を認めるかといった議論は本稿の議論には直接支障がないため、大竹(2014)に拠って一律に $\langle eC \rangle$ と解釈しておく。」(85頁)とする。「問題がないわけではない」という点について、寡聞にしてその後どのように議論が進んだか知らない。なお大竹(2014)は未見。

<sup>4</sup> 西田龍雄(1982)の8-10頁参照。

<sup>5</sup> 類似の表は斎藤純男(2010)、235頁にあり参考とした。

<sup>6</sup> 「A型の条件を満たす資料、つまりわかっている文字でわかっている言葉を書いた資料は、文字も言葉も共にはっきりしているのだから、別に問題がないように思える。ところが、実はそうではない。A型をもう少し詳しく検討するために、この条件を満たす二つの場合を想定してみよう。その一つは、言語Xがその言語固有の文字組織で記録されている場合であり、他の一つはその言葉が固有の文字をもっているか否かに拘らず、近隣の言葉を書き表すために作られた文字によって記録された場合である。いずれもその文字組織がよくわかっていることを前提としている。/改行/ いま取り上げている問題を別の言葉でいうと、文字の性格と言葉の体系の間には、つねにずれがあるのが普通だから、かりに文字組織や言葉の体系がわかっている、その両者の間の関係が明瞭にならない限り、その資料が解明されたことにはならないという主張である。」11-12頁。

#### 4. 契丹大字文と契丹小字文の未解読文字のタイプ

『遼史国語解』など史書にある漢字音訳契丹語により、契丹語がモンゴル語の系統に近いことは早い時期から分かっていた<sup>7</sup>。したがって大字（表意文字が主体）による契丹大字文と小字（表音文字が主体）による契丹小字文が共に契丹語を表記したとするならば B タイプとなる。もっとも次に述べるように漢文との関係が問題となる。

遼、西夏、金、元と新文字が相継いで作製された。そのなかで契丹大字は新文字作製の嚆矢であり、漢字を手本としたことは史書に見える<sup>8</sup>。文字に止まらず、文章も漢文を手本としたであろう。漢文の表現や語順がどの程度契丹大字文に影響を与えたか、それがどの程度契丹小字文に引き継がれたかということが問題となる。先に契丹大字文が作られ、後にウイグル文字・ウイグル語を参照して小字が作られ<sup>9</sup>、小字を用いた契丹小字文が使用された。契丹小字文が使用されるようになった後も契丹大字文は廃れることなく併存した。なぜ併存し得たか。おそらく契丹大字文には契丹小字文とは異なる特質があり併存の意義があったからであろう。両者が異なる特質で“補い合っていた”故に長い間併存し得と考えたい。どの点で補い合っていたか。漢文の影響の大小ではないかと想像する。契丹大字文は漢文の影響が大きい文体で、契丹小字文は影響が小さい文体であったということである。漢文の影響が大きな文体は、漢文に習熟した契丹人にとって学び易いものであり、契丹語ができる漢人にとっては理解し易いものであろう。

いま述べたことは契丹大字文と契丹小字文の“解読が成された”暁には謬見となっているかもしれない。しかし解読の途上にあつては、様々な作業上の想定をしながら進まざるを得

---

<sup>7</sup> 白鳥庫吉(1910-1913)は「漢土の記録は幸にも契丹の數詞三言を後世に傳へり。即ち第一を廼、五を討、百を爪といふこと是なり。而して此等の言が *Dakhur* の *nége, tábu, táwan, žao* に該當し、蒙古語系に屬する言なること亦論を待たず。従つて契丹民族が今日の *Dakhur* の祖先にして、蒙古を骨子とし、之に *Tunguse* の元子を加味せる雜種たることも推知せらるべし。」(320 頁)とする。ツングース語との関係について明瞭でない部分もあるがモンゴル語の系統に属することに言及していることは明らかである。長田夏樹(1951)も各種の史書に見られる漢字音訳契丹語により「多くの点において契丹語はダフル語、モンゴル語、特に後者に近似しているように考えられる。」のようにモンゴル語の系統とする。もっとも、武内康則(2015)には「契丹語の系統については、近年では *Janhunen*[2003]の述べるように、鮮卑が使用していた言語と同じ系統であり、モンゴル諸語と関係があるとされる。しかし、現在一般的に知られるモンゴル諸語の直接の祖先とは言えず、それらとは大きく異なった特徴を持つ言語であつたと考えられている。」(1 頁)とある。

<sup>8</sup> 『新五代史』卷七十二「四夷附録第一」に「阿保機に至り、ようやく近傍の諸小国を併呑し、漢人を多く用いた。漢人は隸書の過半を増減し、文字を数千作り伝授し、これによって刻木による契約に代えた」とある。

<sup>9</sup> 『遼史』卷六十四「皇子表」に「ウイグルの使者が来たが、その語に通ずるものがなかった。太后は太祖に言った。迭刺は聡明であり役に任ずることができると。そこで迭刺を使者に立てた。二旬ほど従っている間に、ウイグルの言語と書に通ずるようになり、契丹小字を作った。それは字数が少なくして通用することができるものであつた」とある。「ウイグルの言語と書」を突厥文字・突厥語とする説もある。

ない。

#### 5. 誰がいつ解読したか

最後に“解読が成された”とは何を指すかということに触れておきたい。解読と言うと「わかりにくい文章や暗号などを読み解くこと」（岩波国語辞典）「暗号や読みにくい文章・古文書などを読み解くこと」（集英社国語辞典）。このような意味で解読を使う場合もあるが、言葉の学問の上で解読と言うと何であろう。先に挙げた西田龍雄(1982)は未解読文字を分類するが、“解読とは何か”、“何を以って解読したと言い得るか”“誰がいつ解読したか”という文化史的な意味での解読については述べない。言語の研究にとって、さほど重要ではないからであろう。しかし文化史として、それは研究史でもあるのだが、見過ごすことはできない問題である。その点を明らかにするためには先ず“解読された”とはどういうことか明らかにしておかなければならない。

解読とは“文字の背後にある言葉を理解する方法を発見し、その方法を利用して言葉の概略を知ること”と考える。その解読の知見を利用して文字組織と言語体系を精密化する研究を進めることになるが、それは解読の次の段階の作業である。そうであるならば“解読された”とは、対象となる文面の背後にある“言葉の概略”を知り文意を理解し得た時である。“概略”で良いのである。その観点から女真文字・女真語を見ると、ドイツ人の Wilhelm Grube 氏によって解読されたと言い得る。解読の時は代表作 *Die Sprache und Schrift der Jurčen*<sup>10</sup> の出版年 1896 年としたい<sup>11</sup>。ところを変えて契丹文字・契丹語となると、“解読が成された”と言える状況にないことは劉鳳翥編著(2014)によって研究の進展を見れば明らかである。しかしながら、文字と言語の知識は契丹文字研究者の研究の積み重ねにより確実に増えており、少しずつ文意は明らかになっている。今後も少しずつ明らかになるとしたら、何を以って“解読が成された”とするか、明確な線を引くことは困難である。契丹文字・契丹語はそのような文字と言語であるかもしれない。

#### 参考文献（発行年順）

Grube,W. (1896) *Die Sprache und Schrift der Jurčen*. Leipzig.

白鳥庫吉(1910-1913)「東胡民族考」『史学雑誌』21-24 編。『白鳥庫吉全集 第四卷 塞外民族史研究 上』(岩波書店 1970 年,63-320 頁)所収による。

長田夏樹(1951)「契丹文字解讀の可能性 —村山七郎氏の論文を読みて—」『神戸外大論叢』第 2 卷第 4 号(昭和 26 年 12 月),40-66 頁。(2001)『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較

<sup>10</sup> Grube,W. (1896) *Die Sprache und Schrift der Jurčen*. Leipzig.

<sup>11</sup> この書は明代の女真館訳語の研究書。女真文字・女真語の解読の場合“発見”というほどの大袈裟なものではなく「対訳資料（主に女真館訳語の対訳語彙集「雑字」）」と「他言語（主に満洲語文語）の利用」というオーソドックスなものであった。

- 言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・民俗言語学試論・邪馬台国の言語—』ナカニシヤ出版、128-150 頁所収による。
- 西田龍雄(1982)『アジアの未解読文字』大修館。もと『月刊言語』1977-4 に掲載されたもの。
- 西田龍雄(1982)の改定増補版に(2002)『アジア古代文字の解読』中央公論新社がある。
- 西田龍雄(1986)「言葉のしくみ」『言語学を学ぶ人のために』世界思想社。
- Janhunen, J. (2003) *The Mongolic Languages*. New York: Routledge.
- 斎藤純男(2010)『言語学入門』三省堂。
- 大竹昌巳(2013)「文字の体系と文字解読の原理」『KOTONOHA』第 131 号、1-11 頁。
- 劉鳳翥編著(2014)《契丹文字研究類編》(全四冊)、北京：中華書局。
- 武内康則(2015)「『遼史』中の音写漢字に反映された契丹語の音声と音韻」『内陸アジア言語の研究』第 30 号、1-27 頁。
- 大竹昌巳(2015)「契丹小字文献における母音の長さの書き分け」『言語研究』第 148 号、81-102 頁。
- 吉池孝一・中村雅之・長田礼子編著(2020)『女真語と女真文字』(CD 書籍) 古代文字資料館。